

# 地域社会のソーシャル・キャピタル生成における ファンサークルのポテンシャルを考察する —「プラスリラックスアートクラブ」の実践を手掛りに—

小林 清実

## あらまし

ハコモノ行政が批判の対象とされて久しいが、その象徴的な存在のひとつと言える施設が美術館である。2007年1月、都心の六本木に開館した国立新美術館のように、華々しい注目を集める施設がある一方で、自治体の財政難を背景に、閉館の危機に直面する地方の美術館も散見される。地域資源であるはずの美術館が存在意義そのものを問われる現状を打開し、図書館や公民館と同様に市民に活用されることを目指すには、行政や文化施設主導の文化振興策に加え、ステークホルダーである美術館の利用者が主体的に関わる対応策が必要である。

しかし、これまで受動的にサービスを楽しんできた利用者の多くが能動的に課題解決に取り組むには時間と場を要する。そこで筆者は、アートへの多少の関心は持ちながらも深めるきっかけがない人々を対象に、身近な体験としてアート鑑賞に親しめる企画を提案し、参加者が楽しみながら自らアートの魅力や課題に気付く場を提供した。やがてそれは恒常的にアートに親しむ人々のファンクラブへと変化し現在に至っている。

この実践でのフィールドワークの過程で筆者は、ファンクラブという「愛好」をテーマに個人が集う空間には、ソーシャル・キャピタル生成や課題解決の可能性が存在するのではないかと考えるに至った。本稿は、この仮説に基づき、フィールドワークによるエスノグラフィを作成

し考察を試み、ファンクラブのソーシャル・キャピタル生成や課題解決の可能性を明らかにしたものである。

第1章では本論説の背景と目的、第2章で方法を提示する。第3章では、ファンサークルの事例として、筆者が主宰するアートファンサークルの6年間の活動でのフィールドワークをエスノグラフィにより提示する。第4章では、ファンサークルが地域社会にもたらす効果をソーシャル・キャピタルの生成や課題の解決ととらえて前章のエスノグラフィを分析し、考察する。第5章では結論および課題と展望を述べる。

## 1. はじめに

日本における昨今の文化政策では、アートセンターやアートプロジェクトのようなオルタナティブな文化事業が注目されている<sup>1</sup>。一方、従来からの文化施設である美術館や博物館は、利用者数が漸減し、巨大な建設費を要しながら不活性なハコモノ行政の象徴的存在とされてきた<sup>2</sup>。

村田によれば美術館は「社会に開かれた公共施設であるにもかかわらず“美術”と“社会”を橋渡しするどころか、美術館そのものが内側の“美術”を外側の“社会”から遮断する額縁のごとき役割を負う」存在とされている<sup>3</sup>。華々しく脚光を浴びる美術館が新設される一方で、経営難から閉館の危機に直面する公立や財団の美術館が出現し始め、美術館をはじめとする文

<sup>1</sup> 近年では、横浜トリエンナーレや越後妻有アートトリエンナーレが著名である。

<sup>2</sup> 上山信一・稲葉郁子『ミュージアムが都市を再生する 経営と評価の実践』日本経済新聞社、2003に詳しい。

<sup>3</sup> 村田真「脱美術館化」するアートプロジェクト（ドキュメント2000プロジェクト実行委員会編 『社会とアートのえんむすび 1996-2000 つなぎ手たちの実践』トランスアート、2001）13ページ。

化施設が直面する課題は大きい<sup>4</sup>。

事態の解決には、文化行政に対する市民の支持獲得を目的とした広報事業の充実や、施設への誘客が急務である。しかし、新聞社や大手広告代理店が広報を担う一部の企画展覧会以外は、一般市民への告知や利用促進の働きかけが充分とは言えない<sup>5</sup>。国や地方自治体も傍観しているわけではなく、2001年12月に市民の鑑賞体験奨励を盛り込んだ文化芸術振興基本法が公布され、条例化し政策に反映する自治体の例もあるが、十分な効果を上げているとは言い難い<sup>6</sup>。

現状を生む背景のひとつに、ステークホルダーであるはずの利用者の視点に立った政策が不十分であることが挙げられる。また、利用者である市民自身も当事者意識を持つ必要性が問われる。そのためには、行政や文化施設主導による文化政策と一線を画す、あるいは行政や文化施設との協働を視野に入れた主体的な取り組みが必要であると考えられる。しかしながら、これまで受動的にサービスを楽しむことに慣れてきた利用者の多く、あるいは、文化政策や文化振興に関心を持たなかった一般市民が、主体的に課題解決に取り組むことが可能になるには時間と場を要する。

そこで具体策として筆者は、アートへの多少の関心を持ちながらも深めるきっかけがない人々を対象に、アート鑑賞を身近に体験し楽しみながらアートの魅力や課題に気付く場を提供した。その活動はやがてアートファンが集うファンサークルへと発展し、さらに参加者が主体的に活動する場へと変化を遂げた<sup>7</sup>。その過程や結果から、対象を愛好し支持する志向を背景に、課題解決につながる行動を日常に無理なく取りこむファンサークルには、地域社会におけるソーシャル・キャピタル生成や課題解決の一翼を担うことが可能ではないかとの仮説を立てるに至った<sup>8</sup>。本稿では、その仮説に基づき、自らの実践に対する考察を試み、ファンサークル

によるソーシャル・キャピタル生成における課題解決への貢献の可能性を明らかにした。

## 2. 方法

京都市を拠点に筆者が主宰するアートファンサークル「プラスリラックスアートクラブ」において、フィールドワークという観点から再検討を試みた。活動は現在も継続しているが、本稿では2000年5月から2006年12月までを対象に考察を実施した。具体的にはこの期間でのフィールドワークに基づいたエスノグラフィを作成し、ソーシャル・キャピタルの定義により分析を試みた。なお本稿は、自らの実践でのフィールドワークに基づく論説であり、したがってモノロークにより語られる部分もあるが、実践において制作された資料、関係者へのインタビュー、取材記事、学会への発表などにより客観性の担保に留意した。

## 3. フィールドワーク

### 3.1 プラスリラックスアートクラブ・誕生前後

アートファンのサークルである「プラスリラックスアートクラブ」は、2000年5月に京都を拠点として開始された鑑賞ツアーが核となり、2001年に発足した。この実践は、アート鑑賞の初心者であった筆者が、アートの魅力を発見し触発されたことに端を発している。

バブル崩壊後の1992年、公共空間へのアート作品設置業務を主な事業とするS社（神奈川県横浜市）に事務職として入社した筆者は、そこでアーティストと施主を仲介するコーディネーター業務に携わる堀川美鈴（仮名）と出会った。

<sup>4</sup> 芦屋市立美術博物館や川崎市民ミュージアムは財政難から存続が一時危ぶまれた。

<sup>5</sup> 「美術館の企画展にマスコミの関わる背景とその功罪」として林が詳しく述べている。林容子『進化するアートマネジメント』レインライン、2004、97ページ。

<sup>6</sup> 地方自治体の文化政策については中川幾郎『分権時代の自治体文化政策 ハコモノづくりから総合政策評価に向けて』、2001に詳しい。

<sup>7</sup> ここで対象とするファンサークルは、排他的なマニアが形成する閉鎖的なものではなく、対象を愛好および応援し、支持層の拡大を図る人々の集まりを指す。

<sup>8</sup> この稿における地域社会は、特定の行政区域を指すのではなく、筆者が活動拠点とする京都市を中心とした、半日程度で移動可能な阪神間の地域を指す。

堀川とともに頻繁にギャラリーを訪問することとなった筆者は、そこで現代アーティストの作品に数多く触れる機会を得た。堀川に連れられて訪ねた現代アートのギャラリーで、現代を生きたアーティストの豊かな表現世界への共感を得た筆者は、鑑賞には知識が必要という先入観から解放され、作品を前に堀川と交わした会話によりアートに対する興味を醸成した。一方的な知識の提供ではなく内省を促す堀川の言葉は、人間に対するアートの大きな影響力を印象付けた。

その後「作品鑑賞により生じる内省は多くの市民に共有される価値を有し、作品を媒介して生じる対話は多様な価値観を共有させる可能性を持つ」との考えに至った筆者は、利用者による利用者のためのアート鑑賞の普及活動の検討を開始した<sup>9</sup>。これは、教養としてのアート鑑賞は一定の普及はしているが、内省や対話を促し多様な価値観の共有を可能とするアート鑑賞は未だ一般化されていないとの判断によるものであった。具体的な手法として、堀川との体験に基づくギャラリーツアーに、親和性を高める工夫を加味した企画が生み出された。これは、筆者が体験した美術館内の鑑賞ツアーの多くが、鑑賞者への一方的な知識の提供に終始することへの疑問を契機のひとつとしていた。また、利用者の立場で練られた企画は、アートと社会の架橋を可能にするのではないかと期待があった。

### 3.2 活動開始

2000年5月、初企画である「フェルメールとワインのゆうべ」が、大阪市立美術館へのツアーと食事会との併催で開催された。参加者は知人が中心であったが、屋号を「プラスリラックス」としてチラシに明記し、一般への告知も実施した。あえて「アート」を標榜しないことにより、アートへの関心が未知数の層へ訴求することが目的であった。

初回から「知識が無くても楽しめる」「名作・巨匠に拘泥せず、好みを選択する」「鑑賞の主体は自己、解説は道具」「他人の感想も楽しむ」ことを重視したが、これはその後のギャラリーツアーの原型となった。具体的には、前半が作

品鑑賞、後半が交流会に充てられ、鑑賞後の一行は、食事を楽しみながら、互いに感想を語り合った。参加者のひとは、「同じように見ている、好みも作品の印象も違う人がたくさんいて驚いた」と、その日の感想を語った。2000年9月には、奈良県内の美術館を訪ねる2回目のギャラリーツアーが実施され、第1回と同様、知識が無くても臆することなく巨匠や名作といった先入観にとらわれない鑑賞や、交流会による追体験が共有された。

2000年12月以降、参加者の鑑賞力向上を目指し、ギャラリーツアーは若干の変化を見せた。作品鑑賞と交流会を併催する形態は踏襲したうえで、ギャラリー訪問の比重を高め、アーティストと鑑賞者の出会いの場を設けたのである。内省や対話に結びつく鑑賞力を養うことを目的としたこの試みは、京都市内のギャラリーTやMに支持され、筆者が堀川に連れられて銀座のギャラリーを回遊した体験を再現する内容となった。

2000年12月17日に実施されたツアーは「みる・聞く・語る」をキーワード次のように進化した。京都市内のギャラリーMに集合した10名の参加者には、その日のプログラムが配布された。筆者による簡単なプログラム案内とギャラリーオーナー紹介ののち、約10点の作品を参加者が個別に鑑賞した。次いで、オーナーへの質疑応答の後、再度作品を鑑賞し、ギャラリーMを退出した一行は、徒歩10分ほどのギャラリーTも訪問し同様の行程を体験した。その後、カフェに移動し、「記憶のスケッチ」と題してその日の感想を語り合い、ハガキに記し、自分宛に送付した。参加者の中には感想を短歌に詠み投函する者もあった。

このように、ギャラリーツアーでは、まず作品に対する参加者の素の印象を重視し、解説を加えずじっくり対象を鑑賞することが尊重された。次いで参加者が質問しやすい雰囲気の中で、ギャラリストと鑑賞者をつなぐ工夫が施され、場を移してその日の感想を互いにアウトプットしあう交流会で終了した。また、ギャラリーツアーでは、作品およびアーティストと鑑賞者は対等な存在として位置づけられた。参加者は、まず作品と語り合うことにより自らと語り合い、次いでアーティストやギャラリストと

<sup>9</sup> 塚本樹『名画はあなたが決める』思文閣出版、1994の影響によるところが大きい。

コミュニケーションを取ることで自らの感覚を整理した。そして交流会における参加者間の感想の交換を通して多様な視野に触れ、鑑賞体験を深めるのがギャラリーツアーの恒常的な流れとなった。

ギャラリーツアーでは、作品の価格も積極的に告知された。アーティストを支えるパトロン不在の現代では、作品の流通が彼らを支援する

手段のひとつとなる。その現実が参加者に認知されることにより、参加者は、同時代を生きるアーティストの存在を肌で感じる事となった。また、活動当初の交流会では、初対面の参加者同士の緊張をほぐすことを目的に、絵葉書などを活用したアイスブレイキングが試みられ、アートへの関心の醸成と交流の活性化が図られた。

上記以外にも、数軒のギャラリーを回遊する



図1 絵葉書を活用した交流ツール

表1 交流を目的とした企画と開催数（2000年～2006年）

実施内容	開催数
交流会	25回
勉強会（自主企画含む）	32回
セミナー・ワークショップなど訪問	3回
参加勸奨企画	アート + アルコール 3回 （うち1回は自主企画） アート + 和 1回 アート + 食 6回 アート + 映画 3回 アート + アニメ 1回（自主企画） アート + 落語 1回（自主企画） コンサート（主催）4回 コンサート（共催）1回 コンサート・パフォーマンス（訪問）7回 計 26回
その他	コレクター訪問 2回 企画展覧会 2回 アートライブ 2回
サークルメンバーによる自主企画	3回（上記「参加勸奨企画」に記載済）

ツアーや、アートをテーマにした食事会や茶話会、コンサート鑑賞や陶器市の散策が実施された<sup>10</sup>。また、まち歩きの途上でギャラリーやアートスポットを気軽に訪問する企画などが盛り込まれ、月2～3回のペースで実施された<sup>11</sup>。アートと異分野を複合した企画は参加者の人気も高く、同時に活動への注目を喚起する結果となった(表1)。告知はホームページとチラシ、および口コミが中心であった。

### 3.3 プラスリラックスアートクラブの誕生

翌2001年7月までの活動を経た時点で、プラスリラックスの活動は、リピーターが生まれるという次の転機を迎えるに至った。次第に聞かれるようになった「ギャラリーツアーに参加したことがきっかけで、アート鑑賞を気軽に楽しめるようになった」「小さな規模で気軽なイベントとして実施してくれることがありがたい」といったリピーターの反応への対応と、主体的で日常的なアート鑑賞体験の原型作りを目

的に、リピーターの積極的な参加を促すアートファンサークルを発足させ「プラスリラックスアートクラブ」と命名した。発足時にリピーター20名程度が入会し、引き続きインターネットやチラシによる募集が実施された。住所氏名や生年などを記入する入会申込書を準備し、入会金1,000円、年会費3,000円が設定され、個人情報の漏洩や迷惑行為の禁止などを謳った会員規約も設けられた。新聞や雑誌の取材効果もあり、サークルへの入会者はその後も増加していった<sup>12</sup>。

一方、円滑なサークル運営の補助的な役割を目的に開始されたメーリングリストでは課題も生じた。交流会と同様の、意見交換の場として提供されたメーリングリストであったが、現実の交流会のような活況を呈することは少なく、管理人である筆者と、限られた投稿者による情報発信の場としてしか機能しなかった<sup>13</sup>。当初は、アートの話題を契機とした多様なテーマの意見交換も試みられたが、政治問題に関する意見の投稿に緊張する場面も数回生じ、多くは読むだけの参加に留まった。メーリングリストの不活性な状態は2006年末まで続いている。



図2 ギャラリーツアー風景 (海岸通ギャラリー・CASO大阪市)

10 「味覚で味わう美術の世界」と題し、美術作品やアーティストと料理人のコラボレーション企画として1年に1回のペースで開催されている。

11 「和で輪す一日」「京都絵めぐり街めぐり」「エスニックコンサート」などが開催された。

12 朝日新聞京都版「知あり技あり」、2002年1月8日掲載、日経新聞「アートへいざなう」、2004年6月18日掲載、京都新聞「創発空間」、2005年1月25日掲載 他。

13 プロのライターなど数名の書き手に限定されがちである。

### 3.4 活動の新たな展開

2003年に入り、活動に更なる変化が生じた。2000年の活動当初は、一般市民に向けたアート鑑賞の普及活動を目的としていたが、ギャラリーを対象にツアーを展開したことにより、目的と結果の間に乖離が生じたのである。現代を生きるアーティストやその作品と市民の出会いは、「説明を聞き、人と話すことで見る目が変わります。美術の楽しさが増しました」「アートに親しみがわいてきた」「一人でギャラリーをのぞくことができた」「いい人に会うことができた」など、参加者のアートに対する新たな視点の醸成の契機となった<sup>14</sup>。しかし、参加者の多くは既にアートに一定の関心を持つ人々であり、本来目的としていた広い市民層への働きかけを可能とする新たな展開が必要となった。

2003年9月、旅行代理店のA社から筆者に向けて、シニア向けの美術館ツアーへの同行講師が依頼され、これを契機に、美術館へのギャラリーツアーの見直しが図られた。当初から美術館への訪問も重ねられてはいたが、ギャラリーで紹介される同時代のアートを普及することに注力されていた。しかし、シニア向け美術館ツアーを重ねた筆者の体験が、既存の美術館と利用者である市民との関係の問い直しを促した。既存の文化施設が十分活かされない現状が、アート鑑賞体験の普及を鈍らせる一因であり、図書館や公民館と同様に、美術館も市民に主体的に活用される施設として見直される必要があるとの問題意識が生じた<sup>15</sup>。

問い直しの結果、2004年に入り、前年までと比較して美術館へのツアーの比率が高まり、ギャラリー訪問を街歩きの散策ポイントとして挿入するなど、内容に少しずつ変化が生じた(表2)。鑑賞と交流を併催する内容は継続されたが、鑑賞や交流会の内容がよりカジュアルかつ参加者本位となり、主宰者である筆者の役割は、コーディネーターから場の提供者へと変化を見せはじめた。主たる訪問対象を、初心者には敷居が高く感じられがちなギャラリーから、初心者が比較的アクセスしやすい美術館へとシフトした

ため、新しい体験としてアートを楽しみたいと考える人々が参加しやすくなり、彼らが気後れせずに参加できる場作りが優先的に配慮されるようになった。また、リピーターの増加に従い、参加者の体験と交流が蓄積され、参加者が主体的に楽しむ場へと変化し、筆者によるコーディネートの必要性が徐々に薄れるようになった<sup>16</sup>。

提供された場をメンバーが主体的に活用し、主宰者による特段のコーディネートをなしでも新規の参加者を既存メンバーが自然に迎え入れる情景が度々見られるようになり、主宰者主導型から参加者主導型への変化が顕著となった。メンバーの一人がリーダーとなった西洋美術の自主勉強会では「自分の気に入ったアーティストを見つける」ことがテーマに掲げられ、現在も継続する人気企画となっている。また、あるメンバーは、自宅の町家を改装しギャラリーをオープンしたが、「アーティストの友人だけで盛り上がるギャラリーではなく、一般の人々にもっと気軽に訪ねて欲しい」とアーティストと一般市民を結びつける企画を積極的に展開している。敷居は低いが、吟味された作品が並ぶ町家の空間は、毎回平均200名の来場者を迎えており、メンバーも度々訪ねるアートスポットとなっている。また、落語会を主催したメンバーは、アートを連想させるネタを盛り込んだうえに、高座を飾る巨大な暖簾の原型を作成し、会場を訪れた一人一人の手が加わることによって暖簾が作り上げられる工夫を凝らした。いずれも、入会当初は受け身な参加であった人々が、互いに刺激しあい批評しあいながら、活動を継続している。前述のギャラリーをオープンさせたメンバーは、「派閥が生まれるような体質にはしたくない。今のうちに、互いに適度に配慮し、信頼しあえる関係を続けたい」と語る。

<sup>14</sup> 『ギャラリー巡りミニツアー 作家らと質疑 交流会で感想』朝日新聞 あいあいAI京都、2002年7月3日掲載。

<sup>15</sup> 都心部における美術館や博物館の課題については上山信一・稲葉郁子、前掲書に詳しい。

<sup>16</sup> 参加者の気軽な参加を促すため、2005年以降、交流会は「サロン」と名付けられた。



図 3 交流会風景



図 4 自主勉強会風景

表 2 美術館およびギャラリーの訪問回数 (2000年～2006年)

訪問年度	訪問回先および回数
2000年5月～2001年6月 (サークル発足以前)	美術館 4回 ギャラリー 13回 計17回
2001年7月～12月	美術館 4回 ギャラリー 7回 計11回
2002年	美術館 7回 ギャラリー 13回 計20回
2003年	美術館 5回 ギャラリー 11回 計 16回

2004年	美術館 9回 ギャラリー訪問 5回 計 14回
2005年	美術館 11回 ギャラリー 2回 計 13回
2006年	美術館 7回 ギャラリー 2回 計 9回

注：上記以外に、美術館・ギャラリー以外のアーツスポット（6回）、博物館・資料館（1回）、まち歩きツアー（22回）、近畿圏外へのツアー（5回）を開催。

### 3.5 今後の展開予想

2000年5月の活動当初から、毎回10～15名のべ1500名近くのギャラリーツアー参加者が美術館やギャラリーを訪問した。また、2001年7月のファンサークル発足以来、プラスリラックスアートクラブのメンバー累計数は100名を超えた。サロンなどの交流会における情報交換も、メンバー間に主体的な鑑賞体験を共有する空気を醸成し、自主的に美術館やギャラリーを訪ねる人々も増加している。2006年12月末の時点では、月2～3回のペースで活動が実施され、うち1～2回は美術館やギャラリーへのツアーと茶話会、他は勉強会やメンバー同士の情報交換の場となるサロンなどの交流会となっている（表1および表2）。

いずれの場も、当初掲げられた「知識が無くても楽しめる」「名作・巨匠に拘泥せず、好みを選択する」「鑑賞の主体は自己、解説は道具」「他人の感想も楽しむ」ことが踏襲されている。メンバーは、鑑賞する作品は同じでも感想を異にする人が存在することに気付き、多様な視点を共有する姿勢を互いに尊重しようとしている。

主宰者主導型から参加者主導型への変化が顕著となったファンサークル活動は、主体的に活動するメンバーはまだ一部に留まってはいるが、今後一層活発になると思われる。前述の落語とアートの会のように、異分野との複合企画がメンバーの自主企画として提案され実施されており（表1）、ファンサークルの今後は、プラスリラックスアートクラブという場を、各メンバーがどのように活用するかを問う段階に

入っている。それは主宰者の筆者自身も一メンバーとして場を活用することを意味する。今後はメンバー各人がそれぞれの居住地あるいは職場などのコミュニティにおいて、あらたな活動を展開する可能性も予想される。

## 4. 考察

一人のアートファンが開始した活動が、100名を超えるメンバーが交流するアートファンサークルへと発展し、アートの課題に利用者の立場で取り組む様子を見てきた。アートへの共感と同時に、アート界を取り巻く現状への懐疑に端を発した活動は、やがて多くの支持者を得、その解決を利用者が主体的に試みる行動を内包する活動へと変化を遂げた。

ここでは、ファンサークルが地域社会にもたらす効果の可能性をソーシャル・キャピタルの生成と課題解決への貢献という視点からとらえ、今事例に基づき考察する。

### 4.1 ソーシャル・キャピタルの定義と課題

#### 4.1.1 ソーシャル・キャピタルの定義

ソーシャル・キャピタルは、社会的資本あるいは社会関係資本と訳され、「社会資本が道路、港湾、空港、上下水道、公園などのハードないわゆる社会的インフラストラクチャを意味している」のに対し<sup>17</sup>、「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることの

<sup>17</sup> 宮川公男・大守隆『ソーシャル・キャピタル 現代経済社会のガバナンスの基礎』、東洋経済新聞社、2004、3ページ。



できる、『信頼』『規範』『ネットワーク』といった社会組織の特徴を指す」とされる<sup>18</sup>。これは、ソーシャル・キャピタルという概念を社会科学全般や一般に広く普及させたロバート・D・パットナムの提唱によるものであり、「その明確な定義に関しては、一般的な合意が存在しているというわけではない」が、公共政策の指針としてパットナムの概念が広く支持されていることから、本稿もこれに倣うこととする<sup>19</sup>。

なお、ソーシャル・キャピタルにおける「信頼」は「知っている人に対する『厚い信頼』と知らない人に対する『薄い信頼』を区別し、『薄い信頼』の方がより広い協調行動の促進につながるため、ソーシャル・キャピタルの形成に役立つ」とされる<sup>20</sup>。また、「規範」は「互酬性の規範」とされ、「均衡のとれた互酬性（同等価値のものを同時に交換）と、一般化された互酬性（現時点では不均衡な交換でも将来均衡がとれるとの相互期待を基にした交換の持続的関係）に分類され、一般化された互酬性は、短期的には相手の利益になるようにという愛他主義に基づき、長期的には当事者全員の効用を高めるだろうという利己心に基づいており、利己心と連帯の調和に役立つ」とされる<sup>21</sup>。これは、日本語の「お互い様」を同様の例として挙げるのが可能である<sup>22</sup>。そして「ネットワーク」には、「職場内の上司と部下の関係などの垂直的なネットワークと合唱団や協同組合などの水平的なネットワークがあり、近隣集団やスポーツクラブといった市民の積極参加による水平的ネットワークが密になるほど市民は相互利益に向けて幅広く協力する」と定義している<sup>23</sup>。

さらに、ソーシャル・キャピタルには同質的なグループ内の結束を固めるような「結合型（ボンディング型ソーシャル・キャピタル）」と異なるグループの関係を橋渡しする「橋渡し型

（ブリッジング型ソーシャルキャピタル）」があるとされる。結合型ソーシャル・キャピタルは、地域、民族、社会階層などが同じグループの間で形成される社会的な結びつきを指し、他方橋渡し型は、異なるグループ間で形成される社会的結びつきを指す<sup>24</sup>。

#### 4.1.2 ソーシャル・キャピタルの課題

ソーシャル・キャピタルは、社会や個人の繁栄にとってその蓄積が重要であるとされる一方で、強力な結合型ソーシャル・キャピタルに内在する排他性の危険性や、社会の中での偏在の可能性などの負の側面（ダークサイド）も指摘されている<sup>25</sup>。

そのため、地域社会におけるソーシャル・キャピタルの生成や変容の条件として、NPOやボランティア団体などによる市民活動が、「先駆性あるいは課題発見力の要素」「人間関係づくりを行なうリーダーシップあるいはコーディネーターの要素」「コミュニケーションのための公共空間の要素」を有することが求められている<sup>26</sup>。さらには、水平的でオープンなネットワークを醸成するための活動のルール（規範）の存在や、市民活動が社会的な成果の実現につながり、市民活動の更なる活発化（信頼関係に基づくネットワークの広がり）などの好循環を導き出すこと、および、橋渡し型ソーシャル・キャピタル培養器としての積極的な活動展開、外部の人・組織との相互信頼形成の促進などが課題として指摘されている<sup>27</sup>。

以上、ソーシャル・キャピタルの定義と課題を提示したが、プラスリラックスアートクラブの活動は、ソーシャル・キャピタルの生成および課題解決にどのような可能性を示すことがで

<sup>18</sup> 内閣府経済社会総合研究所、「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」、平成14年度内閣府委託調査、15ページ。

<sup>19</sup> 内閣府経済社会総合研究所、前掲書、15ページ。

<sup>20</sup> 内閣府経済社会総合研究所、前掲書、16ページ。

<sup>21</sup> 内閣府経済社会総合研究所、前掲書、16ページ。

<sup>22</sup> 山内直人「ソーシャル・キャピタルと地域再生」『CEL』（大阪ガスエネルギー・文化研究所）73号、2005、4ページ。

<sup>23</sup> 内閣府経済社会総合研究所、前掲書、16ページ。

<sup>24</sup> 山内直人、前掲書、5ページ。

<sup>25</sup> 内閣府経済社会総合研究所、「コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する調査報告書」、平成17年度内閣府委託調査4ページ。

<sup>26</sup> 内閣府経済社会総合研究所、前掲書、5-6ページ。

<sup>27</sup> 内閣府経済社会総合研究所、前掲書、6ページ。

きるのであろうか。以下、前述のソーシャル・キャピタルの課題の中から「人間関係づくりを行なうコーディネーターの要素」「課題発見力の要素」「橋渡し型ソーシャル・キャピタル培養器としての積極的な活動展開」「コミュニケーションのための公共空間の要素」の4点から考察する。

#### 4.2 プラスリラックスアートクラブ形成のプロセス

ここではまず、エスノグラフィで述べたプラスリラックスアートクラブ形成のプロセスを整理し、考察の一助としたい（表3）。

アートの門外漢であった筆者は、転職を契機にアートへの興味と共感を自覚し、さらにアートを取り巻く現状に問題意識を持つに至った。その解決策として、利用者による利用者向けの「身近な体験としてアート鑑賞に親しめる」企画の展開を発案した。8年を経た2000年、京都と大阪でギャラリーツアーを開始し、「知識が無くても楽しめる」「名作・巨匠に拘泥せず、好みを選択する」「鑑賞の主体は自己、解説は

道具」「他人の感想も楽しむ」をテーマに、作品鑑賞と交流を楽しむ企画を展開した。

2001年、リピーターの参加が増えたことを契機に、会員規約などを設けたアートファンサークルのプラスリラックスアートクラブを発足し、次第にメンバー数も増加した。サークルの発足により、参加者は鑑賞体験を連続的に積むことが容易となった。2003年、美術館と利用者の関係改善の必要性とアート初心者へのアプローチ不足を認識した結果、ギャラリー中心から美術館中心のツアーへと内容を変更し、活動は新たな展開を見せた（表2）。リピーターの経験が重ねられ主体的に楽しむメンバーが増加し、初心者へのケアもメンバー間で充分に行なわれるようになったことから、筆者のコーディネーターとしての役割は縮小した。主宰者主導型から参加者主導型への変化が顕著となったサークル活動は、今後一層メンバーの主体的な活動が活発に展開されると思われる。

なお、メンバーの年齢構成は1960年以前の生年が全体の8割以上を占め（表4）、中高年が占める割合が高い。また、京都、大阪に居住するメンバーが8割以上を占める（表5）。

表3 プラスリラックスアートクラブの活動年表

年代	活動の特徴	内容
1992～	プラスリラックスアートクラブ 誕生前夜	・アートの門外漢であった筆者による、アートへの興味と共感の誕生 ・アートを取り巻く現状への問題意識の涵養 ・利用者による利用者向けの「身近な体験としてアート鑑賞に親しめる企画」を発案
2000～	活動開始	・「身近な体験としてアート鑑賞に親しめる企画」として、ギャラリー訪問を中心としたツアーを開始 ・リピーターの誕生
2001～	プラスリラックスアートクラブの誕生	・リピーターの参加促進を目的にアートファンサークルを発足。「プラスリラックスアートクラブ」と命名 ・メンバーリストの開始
2003～	活動の新たな展開	・美術館と利用者との関係への問題意識の深化 ・初心者向け企画再考と、美術館ツアーの再検討 ・メンバーによる主体的な取り組みの萌芽 ・主宰者主導型から参加者主導型への変化
2007～	今後の展開予想	・参加者主導型の定着 ・メンバーによる文化行政や文化事業、美術館サポートへの関わり

表4 メンバーの年齢構成

生年	人数
1920年代	3
1930年代	15
1940年代	21
1950年代	22
1960年代	27
1970年代	15
1980年代	1

表5 メンバーの居住地

居住地	人数
大阪府	50
京都府	36
兵庫県	8
奈良県	7
滋賀県	1
関東	4

#### 4.3 人間関係づくりを行なうコーディネーターとしてのファンサークル

プラスリラックスアートクラブは、信頼と規範とネットワークが相関しあうソーシャル・キャピタル生成の条件を満たしながら、人間関係を構築する成人の居場所あるいはあそび場としての機能を果たしている。紹介制はとらず、会員規約に同意すれば誰でも入会することができるシステムは、「身近な体験としてアート鑑賞に親しむ」ことだけを目的とした「薄い信頼」に基づく運営と言える。また、個人情報の保護や迷惑行為の禁止などを示した会員規約の共有は、メンバー間に規範意識を醸成している。新旧メンバーの交流がスムーズに行なわれる背景には、アートに踏み込めず逡巡していた過去の自分と新メンバーの姿を重ねる「お互い様」の精神や、作品の感想を交換する過程で、多様な考え方の存在に驚き、他者を知る体験を繰り返したことも影響していると考えられる。さらに形態に注目すると、組織化されず幹事や役職な

ども存在しないため、ヒエラルキーは存在しない。高齢メンバーに対する尊敬の念などは自然に醸成されているが、筆者が個人情報管理のみをの水平型ネットワークであり、ビジター参加も積極的に受け入れている。現状を見る限り、メンバーの「派閥が生まれるような体質にはしたくない」という願いは維持されていると言える。

この状況は、交流の機会をアート鑑賞に限定せず、食や落語、映画やコンサートなど、他ジャンルとアートとのハイブリッド企画や、まち歩きの中にギャラリー訪問を埋め込むなどの試みを積極的に展開したことより生じたと考えられる。結果的に、活動後半には美術館やギャラリーへの直接訪問の回数は減少したが、大人の居場所、あそび場としての機能を成熟させることを可能にしたと言える（表1および表2）。パットナムが「ヘンリー・ウォード・ビーチャーの『ピクニックを増やそう』という一世紀前の助言は、今日において馬鹿げたものでは全くない」と指摘するように、娯楽や慰労を目的に実施された「ピクニック」がソーシャル・キャピタルの生成に影響を与えていた<sup>28</sup>。それと同じく、課題解

<sup>28</sup> Robert.D.Putnam, *Bowling alone : the Collapse and Revival of American Community*, New York ,Simon & Schuster , 2000 (柴内康文訳『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房, 2006, 512ページ)

決に直接つながらずとも何がしかを共有したいと希望する成人が、垂直型ネットワークの社会と一線を画し、気を使わない程度の信頼とお互い様の精神、かつ、尊大に振舞う人物のいない空間で自らを解き放つことを可能とする居場所あるいはあそび場としてのファンサークルは、人間関係づくりを行なうコーディネーター機能を持つものとして、今後ますます必要になるものと思われる。

ただし、今実践の場合は、水平型ネットワークとはいえ、自主学習企画を除いて、展開される企画は、筆者からサークルメンバーへ提供されたものが大勢を占めている（表1）。自主企画が育つまでには相応の熟成期間が必要との判断によるものであったが、メンバーの自発性を促す配慮や工夫には考慮の余地があったと考えられる。

#### 4.4 課題発見力を培うファンサークル

プラスリラックスアートクラブの活動は、ボランティアやNPOのように参加メンバーがミッションを共有することなく、ただ「身近な体験としてアート鑑賞に親しむ」ことを目的に個人が集うファンサークルにも、課題発見力を培う力が存在することを示している。この活動は「内省や対話を通して多様な価値観の共有を可能

とするアート鑑賞体験は未だ一般化されていない」という、アートと利用者に対して抱いた筆者の問題意識を契機として開始された。しかしその意識は、サークルのミッションとしてメンバーに向けて示されることはなく、参加者同士の顔が見える毎月の小規模企画を積み重ねる中で自然にサークルメンバーに共有された。やがて、美術館と鑑賞者の関係を問う筆者からの働きかけを契機に、美術館の訪問を支持する動きがメンバー間に創出された。結果、ギャラリー訪問に比べ、美術館への訪問比率が逆転することとなった（表2）。

従ってここには既存の美術館ボランティアとアートファンサークルの相互補完の可能性を見出すことが出来るであろう（表6）。従来の美術館ボランティアは、職員を支援する人員として、個々の館への帰属や活動・解散の一定の制約を求められることが多い。またその関係性が、個性ある美術館の運営に寄与する場合もある<sup>29</sup>。一方で今後は、プラスリラックスアートクラブのような、任意のアートファンサークルによる主体的で自由な活動が、複数の美術館を横断して美術館ボランティアを補完する可能性も考えられる<sup>30</sup>。

ボランティアやNPOなど、明確な課題を掲げる市民活動が、平素の活動の中からさらなる課題を発見し、解決に取り組むことは地域社会に好循環をもたらすであろう。しかし、前項で述

表6 美術館ボランティアとアートファンサークルの比較

	美術館 ボランティア	アートファン サークル
利用者の視点	有	有
アートへの愛情	有	有
施設への帰属	有	無
活動の制約	有	無
解散の自由	無	有

<sup>29</sup> 美術館ボランティアの主体性については、島崎が「本来専従スタッフが職務に当たってまず完結しているべき組織がさまざまな原因によって未成熟であるために、上からの要請を受けて、外部の人手であるボランティアを導入したりボランティアの担う領域を拡大することは、専従スタッフ自体の必要性についての疑問を、運営母体である自治体に抱かせてしまうジレンマを伴う」と指摘しており、美術館・博物館ボランティアの主体的な活動も模索されるべきであるとしている。嶋崎吉信・清水直子『がんばれ美術館ボランティア』淡交社、2001、14ページ。

<sup>30</sup> 越野清実（筆者）『美術館への観客動員ボランティアの実践』（国際ボランティア学会 第8回大会発表要旨集録集）、2007、40-41ページ。

べたように、明確な意思を持ってボランティアやNPOへ参加するにはいたらないが、何かしらの関心を共有し集う、成人の居場所としてのファンサークルにも、今事例に見られるような課題発見力を培養する力が存在するのである。

#### 4.5 橋渡し型ソーシャル・キャピタル培養器としてのファンサークル

前節で述べたように、外部で活動し複数の美術館を横断するプラスリラックスアートクラブには、美術館や美術館ボランティアとの相互補完により、美術館の支援を強化する可能性が見出せる。これは、「アートの面白みが理解できる人間とだけ集まりたい」というマニアが形成する結合型ソーシャル・キャピタルとは異なり、プラスリラックスアートクラブのように「アートの魅力を多くの人々に伝え、分かち合いたい」と願うファンが形成するサークルが、橋渡し型ソーシャル・キャピタルを生成しうることを示している。また、特定の地域や階層、教養の程度に影響されることなく、「愛好する」という動機のもとに、京阪間の気軽に集まれる地域に居住する様々な職業、年齢、性別などの異なるグループを架橋していることも橋渡し型の特徴を示す。

プラスリラックスアートクラブは、利用者による利用者のためのアート鑑賞の普及活動であり、利用者とアート、アートと社会の架橋を目指して開始された。結果、「質は高く敷居は低く」との思いをギャラリー運営に反映させるメンバーや、参加者全員の力で完成させる暖簾作りを試みるメンバー、自主勉強会という形で学びの場を共有するメンバーなどが誕生した。この背景には、人と人、人とアートをつなぐ橋渡し型の活動が定着してきたことが理由として考えられる。

共通の目的を掲げて課題解決に取り組むことはしないが、個々のメンバーが各々ファンサークルという場を活かしながら、メンバーの内外に向けて自ら関係を構築していく姿は、ファンサークルという孵化器に生まれた雛が、自らの足で立ち上がり新しい世界に踏み出す姿を連想させる。アートに限らず、「楽しみながら支持し、応援し、ファンを増やしていく」というファン

サークルに通底する特徴は、橋渡し型ソーシャル・キャピタルの培養器として能力を示すものとして期待できる。

#### 4.6 コミュニケーションのための公共空間としてのファンサークル

プラスリラックスアートクラブの活動の特徴に「アート作品を介しての対話」が挙げられるが、この対話により参加者は、自己および他者とのコミュニケーションの機会を毎回の企画で経験した。これらの対話は「知識が無くても楽しめる」「名作・巨匠に拘泥せず、好みを選択する」「鑑賞の主体は自己、解説は道具」「他人の感想も楽しむ」ことが可能な状況で実施されたため、参加者はありのままの自分に近い状況で自己、作品、他者とのコミュニケーションを取ることが可能であったと考えられる。

また参加者は、ギャラリーやカフェなどの親密な空間で、かつ少人数で時間を共有したが、そこはあくまでも公共空間であり、閉ざされた空間ではない。語られる言葉は公開こそされないものの、他者を傷つけるような内容にはなりにくいと考えられる。多様な表現、多様な感想、多様な他者の存在に触れることを通して、参加者は互いに存在を認めながら適度な距離を保つことを学習し、異なる価値観の存在に気付いていったと考えられる。

「愛好する」という動機は共通ではあっても、人それぞれに過ごしてきた人生や価値観が異なることを、ファンサークルという公共空間に身を置くことにより人は学ぶことが可能である。特定の対象への愛好精神を共有する中でコミュニケーションを学習できるファンサークルの存在は、今後も活用が期待できるであろう。

なお、プラスリラックスアートクラブでは、交流促進の一環としてメーリングリストも運営されているが、活況を呈しているとは言い難い状況である。管理を行なう筆者の技量不足、高い年齢層、文章表現に気後れを感じるメンバーが多いことなどが理由として考えられるが、メンバーの多くが現実の公共空間でのコミュニケーションを支持しているとも考えられ、今後の推移を見守る必要がある。

## 5. 結論

以上、プラスリラックスアートクラブの活動を通して、ファンサークルが地域社会のソーシャル・キャピタル生成および課題解決への貢献が可能か否かを考察した。その結果、ファンサークルが行なう市民活動が、人間関係づくりを行なうコーディネーターの要素、課題発見力の要素、橋渡し型ソーシャル・キャピタル培養器としての要素、コミュニケーションのための公共空間の要素を有し、ソーシャル・キャピタル生成における課題解決に対し、貢献が可能であることが明らかとなった。

ボランティアやNPOなどの市民活動の活性化が、今後さらに期待されることは言うまでもない。しかし、一般市民にその必要性が共有され認識されることはそれほど容易なことではなく、個々の市民が主体的内発的な活動として社会の課題に取り組むためには、準備や試用の時間や場が必要である。「愛好」を「支持」に変化させ、思いを共有しながらコミュニケーションを楽しみ、活動を継続させるファンサークルには、その準備や試用の機能が備わっている。今後は、ソーシャル・キャピタル生成へのファンサークルの更なる貢献に期待したい。

なお、今後の研究課題としては、文化行政や文化振興に対するアートファンサークルの具体的な貢献、および、筆者の研究分野であるソーシャル・イノベーションとアートファンサークルの相関に関する探究を重ねたい。

末筆ながら、筆者に転機と研究の機会を与

えていただいた堀川美鈴氏と、不断の支援と協力をいただいているプラスリラックスアートクラブの皆さんへの深い謝意を記させていただきたい。

## 参考文献

- 上山信一・稲葉郁子『ミュージアムが都市を再生する 経営と評価の実践』日本経済新聞社、2003
- 嶋崎吉信・清水直子『がんばれ美術館ボランティア』淡交社、2001
- 塚本樹『名画はあなたが決める』思文閣出版、1994
- 内閣府経済社会総合研究所、『ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』、平成14年度内閣府委託調査
- 内閣府経済社会総合研究所、『コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する調査報告書』、平成17年度内閣府委託調査
- 中川幾郎『分権時代の自治体文化政策 ハコモノづくりから総合政策評価に向けて』勁草書房、2001
- 宮川公男・大守隆『ソーシャル・キャピタル 現代経済社会のガバナンスの基礎』、東洋経済新聞社、2004
- 村田真「“脱美術館化”するアートプロジェクト」(ドキュメント2000プロジェクト実行委員会編 『社会とアートのえんむすび 1996-2000 つなぎ手たちの実践』トランスアート、2001
- 林容子『進化するアートマネジメント』レインライン、2004
- 山内直人「ソーシャル・キャピタルと地域再生」『CEL』(大阪ガスエネルギー・文化研究所)73号、2005
- Robert.D.Putnam, Bowling alone : the Collapse and Revival of American Community, New York, Simon & Schuster, 2000 (柴内康文訳『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房、2006)